

青年期の「ふれ合い恐怖的心性」と 「傷つけ合うことを回避する」傾向の関連について

岡田努

tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp
(金沢大学人間社会学域)

問題と目的

<ふれ合い恐怖的心性の構造>

現代の青年に特有に見られる対人恐怖の型として「ふれ合い恐怖」という症状が注目されている。すなわち、これまで見られた対人恐怖が、人と人が出会い顔見知りになる場面(出会い場面)において発症するのに対して、「ふれ合い恐怖」では顔見知りからより親密な関係に発展する場面(ふれ合い場面)での困難が中心となると考えられている。こうした青年は、形式的・機械的な関係や、情緒的な深まりのない場面には問題を感じない一方で、対人関係が深まる場面において困難を感じるものと考えられている(山田・安東・宮川・奥田,1987;山田,1989)。

岡田(2002)は臨床的な対象ではない一般の青年においても、これと連続した傾向が見られるとし、これを「ふれ合い恐怖的心性」と称した。「ふれ合い恐怖的心性」に関する尺度は「対人退却」と「関係調整不全」の下位尺度からなっていたが、このうち「関係調整不全」については、臨床群と非臨床群の得点差が見られないことから妥当性に疑問が残るとされていた。しかし、臨床的な問題には至らない青年における特徴という点からすると臨床群との差は必ずしも妥当性の要件とはならないだろう。また、本尺度作成過程においては、ふれ合い恐怖に関する臨床的記述に加え、これと関連したいわゆる「おたく」的行動を想定した記述も含まれていた。因子分析の結果、「関係調整不全」下位尺度にはふれ合い恐怖の臨床的記述を中心とした項目から構成されていたが、「対人退却」については、両者の記述が混在していた。これらのことから、「対人退却」が「ふれ合い恐怖」の中核的な状態を示すものかどうかについては、さらなる吟味が必要となる。さらに「対人退却」下位尺度は対人行動そのものを中心とした項目、「関係調整不全」下位尺度は対人関係場面对する不安・恐怖感情を記述した項目から構成されている。すなわち「ふれ合い恐怖」の感情的側面が「関係調整不全」に、その結果生じた退却的な行動が「対人退却」に反映されていると考えることができる。

Table1 現代青年の様々なタイプと他者からの評価・視線への懸念、自己愛スペクトラムの関連についての試案(岡田,2011a)

他者からの評価・視線への懸念	顕形	特徴	自己愛スペクトラム
大↑	(1)ランチメイト症候群	他者の視線のプレッシャーに圧倒され逃避	↑過敏型自己愛
	(2)気遣い・群れ	傷つけ合うことを避けて円滑な関係を維持	
	(3)多元的自己	様々な自己を分離させておくことで他者からの視線に傷つくことから防衛	
	(4)内面的・個別の関係	他者から傷つけられることを恐れず関係を持つ	
	(5)仮想的有能感	他者からの評価を気にせず自己愛的になれる	
小↓	(6)ふれ合い恐怖的心性	他者からの視線・評価の圏外に撤退 誇大的な自己が露呈しないよう防衛	誇大型 ↓自己愛

<現代青年の友人関係の特徴との関連>

ところで、岡田(2002)では「対人退却」傾向が高い「ふれ合い恐ろしい」な青年は、互いに踏み込まないようにしようとする「不介入」下位尺度得点が高い一方、表面的に円滑な関係をこなす傾向は見られなかった(軽躁的な傾向を示す「群れ」得点が高かったのは、関係的自己意識が高い群と、低不安群であった)。しかし、「関係調整不全」感の高まりの結果「対人退却」という防衛が行われた場合の他、対人関係から退却せず、関係を維持しながら他者に気遣う防衛方略を取る場合には軽躁的な傾向も高くなると考えられる。

<自己愛との関係>

岡田(2011a)は、(対人退却のみを中心とした)ふれ合い恐ろしい心性を誇大的な自己が露呈しないよう防衛するために他者からの視線・評価の圏外に撤退することと想定した(Table 1)。しかし岡田(2011c)では、誇大型自己愛から対人退却への明確な関連は見出されなかった。ふれ合い恐ろしい心性の中に「関係調整不全」を含んだ場合、表面的に円滑な関係を維持する形での防衛によって不全感を回避する方略もありうるだろう。この場合、ふれ合い恐ろしい心性は、むしろ過敏型自己愛起源の面もあると考えられよう。

以上のことから、本研究ではふれ合い恐ろしい心性の尺度について再検討を行うため、併存的妥当性を検討するとともに、自己愛、友人関係のありかたとの関連についてモデルを構成し、構造を検討するものである。

すなわち、自己愛のうちの他者からの否定的評価を恐れる評価過敏性によってふれ合い恐ろしい心性のうちの「関係調整不全」としての感情が生起する。

これに対する防衛として2つの方向性が考えられる。

1) 他者との関係から退く(対人退却)という行動を起こす。さらに、Table 1 に示したように、対人退却は自己愛のうちの「誇大性」によっても生起するだろう。対人退却の結果、他者との距離を置く友人関係となることで、自己愛の傷つきを回避することができるだろう。

2) また、対人関係から退くのではなく、関係を維持しようと努力する方向も考えられる。この場合には、不全感を伴ったままのため、岡田(2011b)と同様のプロセスが働き、他者から自分が傷つけられる恐れが生じ、それを避けるために相手を傷つけないように振る舞い、その結果、円滑な関係(軽躁的關係)が維持されるだろう。

方法

調査時期 2012年1月 北陸および北海道の4年制大学学生および大学院生(1年生から M2) 209名(男子84名、女子125名) 18歳~26歳。

尺度項目

- 1) ふれ合い恐ろしい心性尺度: 岡田(2002)において作成された尺度で、「関係調整不全」「対人退却」の下位尺度をもつ。
- 2) ふれ合い恐ろしいに関する尺度: 福井(2007)が作成した尺度。「友人関係形成困難」「対面不安」の下位尺度をもつ。岡田の尺度の併存的妥当性の確認のために用いた。
- 3) 傷つけ合い尺度: 岡田(2012)において作成されたもののうち「傷つけられ回避」「距離確保」「傷つけ回避」の3下位尺度を用いた(「礼儀」下位尺度は用いられなかった)。
- 4) 軽躁的關係: 岡田(2005)で作成された友人関係尺度より同下位尺度を用いた。
- 5) 評価過敏性-誇大性自己愛尺度: 中山・中谷(2006)が作成した尺度で「評価過敏性」「誇大性」の下位尺度をもつ。

いずれも、全くあてはまらない(1点)~とてもあてはまる(5点)の5件法とした。

結果と考察

1) ふれ合い恐怖的心性尺度について確認的因子分析を行った結果, CFI=.827 と低めだが, RMSEA =.096 でほぼ有効であると考えられる(Table 2)。

Table 2 ふれ合い恐怖的心性尺度の確認的因子分析の結果

項目	標準化係数
6 人と雑談するのは苦手だ	.762
14 人といても話題がなくて困ることが多い	.723
23 人という場面で, 言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる	.547
28 他人の本音で 自分が傷つけられそうな気がする	.347
37 他の人は自分を受け入れてくれない	.507
45 友だちと2人きりである場面は苦手だ	.554
50 他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	.479
5 一人で趣味に没頭していたい	.532
9 他人と親しくなるのはうっとうしい	.679
17 友だちと一緒に食事をするのは好きでない	.715
33 友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	.593
44 友だち数人でいる場面は苦手だ	.497
47 できることなら人とあまり関わりになりたくない	.707
51 できれば食事は一人でとりたい	.809
53 人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	.747
*34 大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだ	-.439
*42 昼食は友だちと一緒に食べるのが好きである	-.702

2) ふれ合い恐怖に関する尺度との相関. 福井の尺度得点との相関を求めたところ, 「関係調整不全」下位尺度は「友人関係形成困難」とは $r=.84$, 「対面不安」とは $r=.62$ であった。また「対人退却下位尺度」は「友人関係形成困難」と $r=.58$, 「対面不安」と $r=.70$ であり, いずれも高い相関が見られた。このことから「対人退却」だけでなく「関係調整不全」下位尺度も, ふれ合い恐怖を構成する内容であると考えられる(Table 3)。

Table 3(ポスターの Table 2) ふれ合い恐怖に関する尺度との相関

福井の尺度\岡田尺度	関係調整不全	対人退却
友人関係形成困難	.84	.58
対面不安	.62	.70

3) Figure1 のモデルについて共分散構造分析を行った。

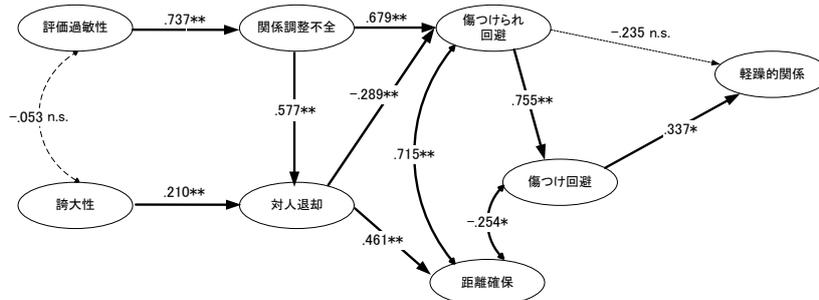


Figure 1 ふれ合い恐怖的心性と自己愛・友人関係に関するモデル

その結果、(1)自己愛とふれ合い恐怖の関連においては、過敏性自己愛が関係調整不全に、誇大性が対人退却にそれぞれ関わること、(2)ふれ合い恐怖の「関係調整不全」に対する防衛として1)他者との関係から退き(対人退却)相手の距離を取ることで安定しようとする方向と、2)関係を維持することにより、傷つけられる恐れが生じそれを回避するために、傷つけることを回避する中で、円滑な関係を維持しようとする、という2方向が示された(なお、項目得点を観測変数としたため推定すべき母数が多くなりCFIは低くなったがRMSEAはほぼ適合水準と考えられる)。

山田ら(1987);山田(1989)の臨床的知見と異なり、岡田(2002)においては、対人退却得点の高いクラスタにおいて、軽躁的な友人関係の得点が高い傾向は見られず、ふれ合い恐怖的心性を持つ青年が表面的な友人関係を円滑にこなしているとは言えないとされていた。しかし本研究の結果からは、これは「関係調整不全」に対する対処方略の違いと見ることもできる。すなわち、関係をうまく調整できないことから対人関係から退却してしまう方略をとった場合には軽躁的關係には結びつかない一方で、調整不全感を抱いたまま関係を維持しようと努力し、傷つけ合うことを回避する中で、表面的に円滑な関係が生まれると言えるだろう。

なお、岡田(2011c)と異なり誇大型自己愛とふれ合い恐怖的心性の間には弱いパスが見られた。これは、ふれ合い恐怖的心性のうち、過敏型自己愛を起源とするものと、誇大型自己愛を起源とするものがあり、両者が分離して示された可能性が考えられよう。

引用文献

- 福井康之(2007).青年期の対人恐怖—自己試練の苦悩から人格成熟へ 金剛出版
- 中山留美子・中谷素之(2006).青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究,54,188-198.
- 岡田努(2002).現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究,10,69-84.
- 岡田努(2005).現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集(行動科学・哲学篇),25,15-32.
- 岡田努(2011a).自己愛と現代青年の友人関係 小塩真司・川崎直樹(編著)自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房 pp.184-200.
- 岡田努(2011b) 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究,20,11-20.
- 岡田努(2011c) 現代青年の友人関係とふれ合い恐怖的心性 再考 日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集,222
- 岡田努(2012).現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成—傷つけ合うことを回避する傾向を中心として 金沢大学人間科学系研究紀要,04,19-34.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子(1987). 問題のある未熟な学生の一親子関係からの研究(第2報):ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集,23,2,206-215.
- 山田和夫(1989).境界例の周辺:サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法,15,350-360.

注)本研究は科学研究費補助金 基盤(C) 課題番号 20530589「現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究」の一部として実施された